移行期における精神科療養病棟で暮らす人々の経験
―60 年間入院生活を送る A さんの日常に注目して―

神戸市看護大学
石田絵美子

【目的】

精神保健福祉領域における「入院医療中心から地域生活中心へ」という方策が世界的に推進される中で、日本においても、病院での退院支援や地域で患者たちを受け入れるサービスの整備など、急速な改革が進められている。本研究では、20 代前半に入院して以来、約 60 年間入院生活を送る A さんの日常に注目して、移行期の中、彼女が病院でどのような支援を受けながら、如何に日々を過ごしているのかを記述的に追及することを目的とする。近年の地域移行や地域での支援が注目される中で、本研究において、今日の病院の患者たちの入院生活の実態を明らかにすることにより、退院が困難で入院生活を余儀なくされている多くの患者たちへの支援だけではなく、長期入院を経て、地域で生活する患者たちへの支援の在り方にも示唆を与えることになると考える。

【方法】

①研究デザイン：現象学的アプローチ

② 調査期間：平成 29～30 年（各年の 8 月～9 月）の計約 2 ヵ月

調査対象施設：単科の精神科病院の療養病棟

研究参加者：研究参加者である患者 4 名のうち、本報告では 1 名の語りに注目した。また、患者を支援する看護師長や OT などのスタッフにも研究参加を依頼した。

③ 方法：フィールド調査と個別インタビュー法

④倫理：研究者の所属する大学の倫理審査委員会の承認と対象施設の院長の承諾を得た。

【結果と考察】

A さんの限られた語彙で、平易な日本語で語られる入院生活は、60 年間の長い入院生活を想起させる語り方であり、しばらくすると「もう話したわな」と、語りの内容が発展的に展開せずに堂々巡りに陥るほどに、単調なものであると推察された。一方で、A さんは、自らの体験と、時に妄想によって、過去に見たり聞いたりした仲間の治療を織り交ぜながら、これまでの入院生活を自らの経験として語ってくれた。また、入院前に共に暮らした兄弟を、妄想として今の生活の中でも見出し、妄想の家族とともに今を生きていることが明らかとなり、単調な生活の中にも、豊かな時間があると考えられた。このように妄想と現実を往来しながら、穏やかに強く生きる A さんの今後のよりよい生活のために、残された時間をどこでどのように暮らすことがいいのか、悩み葛藤しながら、慣れた病棟がいいという A さんを外の世界へと誘う看護師長などの支援を受けながら、A さんは、60 年間にわたる長期の入院生活を成り立たせていた。